

オキクラゲ



ほとんどは青色だが、色のバリエーションがあるオキクラゲ

久保田 信

47



オキクラゲは名前の通り、沖合に生息するクラゲだ。大きさはおとなの握り拳くらい。ミズクラゲやアカクラゲの親類で比較的小型の鉢クラゲである。不思議なことに付

着世代であるポリプ時代がなく、一生を外洋で浮遊生活する。ではどうやっておとなになるのだろうか？
雌雄のおとなのクラゲがどこか岸辺から遠い外洋で出会い、卵や精子を出しあって、まずは受精卵ができる。一つの卵が二つ、四つ、八つ…と倍々に細胞の数を増やしていく、やがて細長い楕円(だえん)体のプラヌラ幼生となる。ここまでではほかの鉢クラゲ類と同じだ。

ところがオキクラゲの不思議さはここから始まる。幼生からポリプ時代を経過せず、いきなりクラゲに成長するのである。回転して

泳ぐプラヌラは、2、3日もあればエフィラというクラゲの最も若い姿になる。エフィラはほかのプランクトンを食べて育ち、1カ月もすればおとなのクラゲになる。

このようなクラゲこそ原始的で祖先型ではなからうかと思っている。クラゲは進化の過程で、ポリプという自分の分身をたくさんつくる発育段階を持つようになり、いろいろな種に分かれ、繁栄してきた。だが、このオキクラゲは普通の動物のようにクローンをつくらず、1個の卵から1個のおとなのクラゲになる。昔のままの生活を続け、厳しい食物連鎖の世界を生き抜いてきたのだ。

美しい海の青い色に染まるオキクラゲだが、画像のように濃い紫色や赤みがあった個体もいる。オキクラゲは外洋性なので、世界中の暖かい海に生息している。日本ではあまりなじみはないが、地中海では大量出現しては海水浴客を刺して悩ませている。

(京都大学准教授)